

精巣がん患者の生存率

大島 明* 北川 貴子 味木 和喜子 津熊 秀明
武中 章太 井浦 晃

1. 目的

精巣がんの予後に関しては、欧米では 1980 年以前には 5 年生存率が 70 - 80%であったが、1980 年以後向上し最近では 90%以上となったことが報告されている。大阪府がん登録および大阪府立成人病センターの院内がん登録では、これまで、精巣がんのように頻度の少ないがんについての生存率データはまとめていなかった。そこで、今回、精巣がんの生存率を計測してその推移について検討し、さらに国際比較をおこなうこととした。

2. 方法

今回の解析の対象とした精巣がんの患者は、大阪府がん登録においては 1975 ~ 1992 年の 18 年間に登録された 709 人(大阪市を除く大阪府内在住のもの)であり、また、成人病センターの院内がん登録においては、1975 ~ 1993 年の 19 年間に登録された 113 人である。生存率の計算は、40 例以上の場合は生命表方式、40 例未満の場合 Kaplan-Meier 法を用いておこなった。

3. 結果および考察

大阪府がん登録による 5 年相対生存率は 1975-77 年に診断されたもので 59.5%、その後向上したが、最新の 1990-92 年に診断されたものでも 77.9%にとどまっていた(表 1)。診断年による 5 年相対生存率の推移をヨーロッパ

の値 (EUROCARE study)、米国の値 (SEER program) と比較すると、ヨーロッパ、米国の両者とも 1980 年頃を境に生存率の上昇がみられているのに対し、大阪府がん登録では上昇の時期が遅れ、かつ、全体の時期を通じて欧米に比べて低い値であった。進行度別にみると、領域、遠隔転移のものでは改善してはいるものの、米国に比べて低くとどまっており、特に、遠隔転移のものではっきりした差が見られた(図 1)。さらに、診断年により前期 (1975-83 年) と後期 (1984-92 年) に分け、臨床進行度別、治療病院の規模別、組織型別に多変量解析した結果によると、中小病院・診療所、大病院、大学病院・特定病院の順に生存率が高くなり、施設間格差が認められた。

一方、成人病センター院内がん登録 113 人の生存率は 91.5% で、大阪府がん登録に比較して高く、かつ、1980 年頃を境とした生存率の上昇がみられた。成人病センターの患者の進行度分布は、大阪府がん登録と比べて差はなかったが、生存率は大阪府がん登録に比べ高く、欧米の値と比べて差はなかった。特に、臨床進行度が遠隔転移のもので生存率は、成人病センターと欧米の間に差を認めなかった。

以上の成績は、大阪府における精巣がんの治療に問題があることを示している。大阪府がん登録および成人病センター院内登録のデータを用いて精巣がん患者の生存率を計測したのは今回が初めてであり、国際比較も今回が初め

*大阪府立成人病センター調査部

てである。その結果、大阪府においては、シスプラチンを中心とする多剤併用化学療法の普及の拡がりとスピードにおいて問題があることが示唆された。今後、さらに広く他府県の地域がん登録のデータを収集して、精巣がんの生存率を計測し、今回観察されたことが、大阪だ

けでなくわが国全体に当てはまるかどうか、検討する。

本研究は、大阪大学医学部の学生実習（公衆衛生）の一環としておこなった。

表 1. 大阪府がん登録における精巣がんの5年相対生存率の推移

	n	5年相対生存率 (95%CI)
全例	709	75.2 (63.5-80.7)
1975-77年	75	59.5 (47.3-71.7)
1978-80年	116	73.9 (65.7-82.1)
1981-83年	126	72.3 (64.3-80.3)
1984-86年	131	80.9 (74.0-87.8)
1987-89年	139	78.9 (71.8-86.0)
1990-92年	122	77.9 (70.3-85.5)

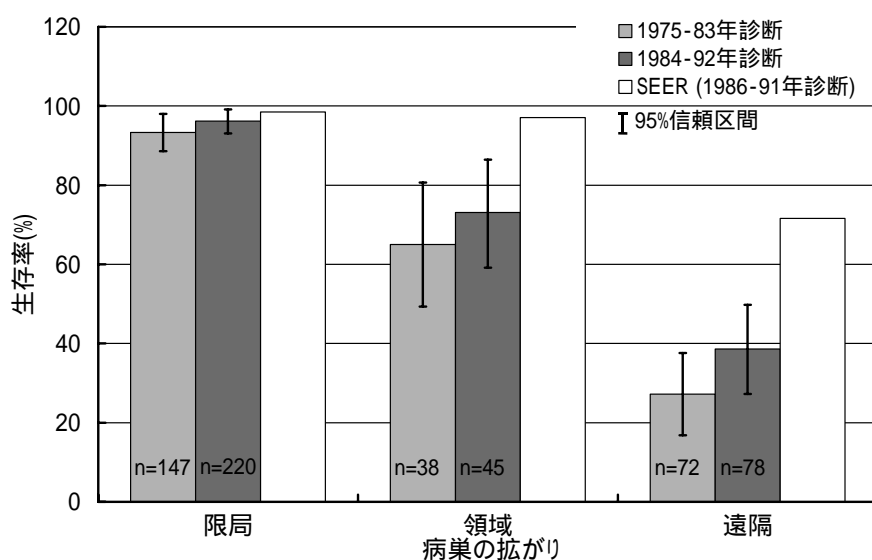


図 1. 診断年別、病巣の拡がり別精巣がんの5年相対生存率 (大阪府がん登録と米国 SEER との比較)